

2015年度日本数学会出版賞受賞者のことば

伊東 俊太郎 氏

日本数学会出版賞受賞について

このたび日本数学会の出版賞を受賞し、大きな喜びといたします。私にとって数学は一種の学問的恋人であり、長く愛し続けてきました。専門は科学史・科学哲学で、学部は東大文学部哲学科の出身ですが、もともと旧制東京高等学校でも、新制東大教養学部でも理科生でした。とりわけ数学には東京高校時代に黒須康之助先生に出会い、集合論の手ほどきをうけてから、にわかに関心がつり、同じ高校出身の矢野健太郎先生に紹介していただいたり、伏見康治先生や河田敬義先生のことを伺ったりして刺戟をうけました。しかし私の数学への関心は、どちらかと云えば、そのテクニクの面よりも思想的哲学的な面にあり、またその歴史的発展のつながりにあったようです。哲学科の卒業論文「無限の構造について」は、形式主義や直観主義についての数理哲学的な考察でした。

哲学の大学院に進んでも、数学への関心は続き、末綱恕一先生の「数学基礎論」の演習には出て、そこで前原昭二先生と出会い、一緒にゲンツェンの本を読んでもいただきました。その後プリンストン高等研究所の客員研究員となったとき、ゲーデル博士のところに来ておられた竹内外史先生とも仲良くしました。八杉満利子さんも一緒でした。ここでは、私の中世科学史の恩師クラゲット先生と「ユークリッド研究」に従事し、その結果、日本に帰ってから彌永昌吉先生と共著を出させていだいたり、小平邦彦先生と対談をさせていただきました。

そんなわけで、私と数学史との関係は切れることなく続き、古代オリエント数学、ギリシア数学、中世数学、比較数学史などについて幾つかの著作を公にし、世の数学に対する認識にいささか役立ったかと思えます。今それが認められて受賞にいたりましたことは有難く、ここに深く感謝申し上げます。

伊東 俊太郎
東京大学名誉教授

* * * * *

赤 攝也 氏

このたび日本数学会の出版賞を頂いたことをたいへん光栄に思います。

それで、この機会に、私と出版との係わりのゆくたてを少々書いてみたいと思います。

数学の教師になって間もないころ、私は数学というものの“宣伝”がぜひとも必要だと痛感させられる経験をしました。大学を卒業してすぐ立教大学の数学教室に就職したのですが、最初に命じられた講義は、文学部英米文学科の一年生の一般教養の“数学”でした。「文学部」の学生に数学を！私は途方に暮れたのですが、いろいろ考えた結果、確率統計の初歩を教えることにしたのです。銅貨投げ、サイコロ振り、トランプ遊びなどを材料にして、噛んで含めるように話していきました。

学生諸君はよく聴いてくれるように思われました。みんな私の方を見ている。出席率もよい。—しかしわかってくれているというのは全くの誤解でした。時がたつにつれて学生諸君は講義を聴いているのではなく、それぞれ勝手に別のことを思っているのだということがわかって来たのです。なんという彼らの忍耐！しかし私には何の手だてもない。結局、そのまま素知らぬふりをして講義を続けるほかありませんでした。ですが、同時に、次年度の講義の準備を始めました。文系の学生諸君はみんな数学を嫌っている。しかしそれは数学の何たるかを知ってのことではない。勝手に嫌っているようだ。ではどうすればよいか。—この問題に対する私の答えは、数学の何たるかを率直に語ろう、というものでした。それには講義のあらましを書いたテキストがあったほうがいいだろう、—こうして出来たのが“数学序説”というプリント（ガリ版刷り）でした。1950年のことです。“序説”というのはデカルトの『方法序説』から (!!) 拝借したのです。幸いこれを使つての講義はまずまずの成功でした。“まずまず”とはいえ、私は大いに自信をもったのです。頑迷な諸君の何割かの洗脳に成功したのですから。しばらくして、このプリントの改訂増補版が培風館から出版されることになりました：“吉田洋一・赤攝也著『数学序説』(1954)”がそれです。これがどのようにして出来たかは、本の冒頭に吉田洋一が詳しく書いています。類書のまったくない当時、この本の出版という冒険を敢行して下さった培風館の山本慶治社長と野原博編集長には深い謝意を表すものです。しかしよく売れてくれました。たいそう褒められもしました。そしてこれにより、その後の出版活動が可能になっていきました。

次第に私は数学の“宣伝”を一種の趣味とするようになりました。講義、講演、入門書や教科書の出版、専門書のシリーズの監修、数学関係の雑誌の記事の執筆。

これらがたいそう楽しいものになったのです。「数学セミナー」誌へはたくさん記事を書きましたし、長く編集顧問を務めました。「bit」誌は我が国初のコンピュータ・サイエンスの雑誌ですが、これは私と共立出版の社長南条初五郎氏および編集者塩谷茂氏が組んで創刊したものです。「bit」という誌名は私の発案。現在はもうありませんが、斯界に少なからず貢献したと自負しています。南条社長、初代編集長塩谷氏の見識はなみなみならぬものでした。「数理科学」誌へは、評判の落ちたブルバキの構造主義の補強をも兼ねて「数学概論」という長い記事を連載しました。これはのちに『現代数学概論』（筑摩書房）という単行本になりました。（本書の「計算論」の部分には類書がありません。）

大体以上のごとくですが、これらのことが可能だったのは、私が非常に幸運な人間だったからに違いありません。その上多くの方々のご好意に恵まれたことも幸いでした。大変有難いことです。

今度の賞は、このような私のいわば“趣味”の結果に与えられたものですから、少々忸怩たる思いがありますが、この賞を頂くことは、数学文化にいささかの寄与をした証しなのですから大変うれしく思います。

私を推薦して下さった方々、および日本数学会に深く感謝いたします。

赤 撮也

* * * * *

一松 信 氏

このたび日本数学会出版賞を受賞し、光栄に存じます。特定の著作というより、永年にわたる著作活動を評価して頂いたと感謝しております。色々雑多な書物を出版して下さった各書店にも厚く御礼申し上げます。

記録を残す意味で少々内幕話も含めて宣伝めいた回想録を敢えて記します。

私の著作の大半は既に絶版で、手許にも持ち合せのない本が多く、質問を受けて当惑したこともあります。最も寿命の長いのは「数学公式 I, II, III」（岩波書店、初版 1956-60）ですが、これは編集者の一員という形でした。最初の本は大学院学生時代に書いた複素関数論の入門書です。これは当初某大先生のゴーストライターという約束でしたが、最終的に私の名で発行されました。この本は習作でしたが後に「函数論入門」（培風館、1957）や「留数解析」（共立出版、1979）に発展し、また「多変数解析函数論」（培風館、1960）にもつながったと思います。

啓蒙書としては「暗号の数理」（講談社ブルーバックス，改訂版 2005）が今でも出ています．最近「数の世界」（丸善出版，サイエンスパレット，2015）を執筆しました．

「現代に活かす初等幾何入門」（岩波書店，2003）は，岩波講座応用数学中の拙稿を改訂増補した単行本化です．今だから打ちあげますが，もとの講座本の執筆はピンチヒッターであり，東京に単身赴任中，限られた日時と紙数の中で仕上げるのに苦労した記憶が残っています．それまでと異質な分野でしたが，後に「重心座標による幾何学」（現代数学社，共著，2014）に発展しました．

諸方面にわたっていささか書き散らした拙著の宣伝めいた記述に終始しましたが，老人の回想録としてお許し下さい．今後とも精進し続けたく，宜しく願い申し上げます．

一松 信

京都大学名誉教授，日本数学検定協会名誉会長